

特集：卒業

生命環境学群学生表彰を受賞して

小長谷 達郎（筑波大学 生物学類 4年）

生物はとてよくできている。生物の形やしくみ、行動があまりに合理的で驚く機会も多い。しかし、なぜ、生物はこのような形をし、このような行動をするのだろうか。昔から生き物が好きでどちらかというと生物の形や行動の意義に興味をもっていた私は、行動生態学の研究をしたいと思い、早い時期に渡辺守研の門をたたいた。

幸い筑波大学や生物学類では、卒業研究の始まる前から研究室に出入りすることをサポートする制度があった。それらを利用して、生の研究に触れることができたのはとても良い経験だったと思う。最初はゼミに参加したり、先輩の研究の手伝いをしたりして手法を学び、そのうち、休日や午後の講義のない時間に自分の研究をするようになった。

この頃から卒業研究まで、私はチョウ類の精子競争を研究テーマにしてきた。精子競争とは、複数の雄由来の精子による卵への授精を巡る競争のことで、雄の繁殖成功率に如実に影響する現象だ。昆虫類では精子競争が雌の体内で起こるため、外から見てもよくわからない。そのため、解剖技術を習得してデータを取れるようになると、一気に世界が広がった気がした。誰も見たことのない世界を見たい！という気持ちがこの時昂ぶり、今の研究に続いている。

その後、幸運にもアメリカでの共同研究に参加する機会を得たり、学会に参加したりと、様々な研究活動をすることができた。僭越にも生命環境学群長賞を受賞できたのは、これらの活動に依るところが多いと思う。ところが、自分の中で、早くから活動していたことは、良い経験であると同時に一抹の不安でもあった。それは、早くから専門を意識していたことが視野を狭くしているかもしれないという不安だった。

そのような意識があったからか、研究室に入ったばかりの時、先生に「研究とはどういうものなのか、考えなさい。」と言われたことが印象深く残っている。この言葉はまだ何もわかっていない一人の学類生に、単に研究のプロセスを考えるよう促すためのものだったかもしれないが、研究とは何かという疑問は、自分の中で長きにわたって大きな位置を占め続けてきた。他の分野とどう違うか？研究の目的は何か？どのように研究を続けるべきか？社会の役に立つか？など、疑問はいくつも転がっている。

研究とは何か？という疑問を胸に講義を受けたり、本を読んだりすると、自分の研究とのスタンスの違いが見えてきた。科学哲学に関心をもったこともあった。仲間とともに色々な分野の人を招き、研究の動機とか目的を話してもらったこともあった。その結果、（当然と思われるかもしれないが）分野や人によって研究の細かい意味の違うことによりやく気がついた。

研究とは何かという疑問に、まだ自信のある答えは見つからない。しかし、研究とは何かを考えてきたことで、自分の研究の“位置”を認識することができるようになったと思う。当然、努力は

まだまだ必要とはいえ、不安の反動も今となっては自分の研究を考える良い経験になったと思う。

視野が狭くて損をすることがあっても、広い視野をもって損をすることはない。これは間違っていないと思うので、広い視野を得ることを是非おすすめしたい。自身の興味のあることをじっと眺めることは、確かにとっても面白い。ただ、時には一歩下がってみることも大切だと思う。それがいつ見えるかはわからないが、新しい景色は、もっと面白いものかもしれないからだ。

生命環境学群学生表彰（生命環境学群長賞）を受賞して、自身の研究とそれに関係する活動のことを振り返ってみました。私自身、視野を広くもつことを実はできていないかもしれず、研究もまだまだ発展途上です。そんな自分の考えにどれほど価値があるかはわからないなと思いつつこの文章を書きました。誰かの参考になれば幸いです。

4年の間、多くの人のお世話になりました。この場を借りて御礼申し上げます。

Communicated by Takeo Hama, Received April 19, 2013.